

和歌浦・愛宕山の石造物調査

—近世和歌山城下町災害史研究事始め—

A Study of Stone Works in Wakanoura Atagoyama

海 津 一 朗

Ichirou KAIZU

(和歌山大学教育学部歴史学教室)

2012年10月5日受理

1 愛宕権現社と円珠院

『南紀徳川史』によれば、1622年(元和8)に藩主徳川頼宣の見立てによって比叡山の愛宕社を勧請したのが愛宕権現社である。東照宮造営の翌年に、その残木を用いて建てられたという。愛宕権現社は東照宮と一体の宗教施設であったことがわかる。かつては愛宕山の山頂にあったが、弁天社とともに現在の南西山麓に降ろされた(現在、山上には社殿の一部と六地藏が残存)。円珠院が別当寺院となり、その住職には叡山北谷不動院最順を迎えて雲蓋院末寺(外六ヶ坊)とした⁽¹⁾。高橋修氏は、和歌浦愛宕権現社は東照宮の東照宮の北東に立地し、鬼門を守る神として勧請されたと推測する⁽²⁾。これに従うなら、近世和歌浦景観の重要な構成要素といえることができるだろう。

すでに福塚隆介氏・江本英雄氏が紹介したように、このような愛宕山の歴史的な景観は、2015年に開催予定の和歌山県国体にともなう地域振興策によって危機に瀕している⁽³⁾。この2～3年の間、第2国体道路建設にともない重要な遺跡が検出と同時に破壊されてきた(和歌山県文化財センターや和歌山市のHPを参照)。和歌浦の国指定と保存が進められているにもかかわらず、愛宕山がその構成要素と認識されないのはたいへんな手落ちに思われる。ここでは、基礎データを提示して、近世城下町研究プロパーたちによる本格的な取り組みをまちたいと思う。

2 愛宕山の境界性—近世終焉の序曲

石造物調査の成果を検討するに先立ち、和歌浦・愛宕山の性格を示す事件をひとつだけ紹介したい。以下は、和歌山県文化遺産課勤務(当時)の川合亜悠氏の研究成果にもとづく⁽⁴⁾。川合氏は、紀州藩半番頭家文書とよばれる史料群の中から見世物小屋興行に関する記事を抜き出して、考察を加えた。なかでも規模の大きかったのがこの愛宕山での開帳・芝居興行であったという。

「一 寅ノ三月三日より愛宕山開帳に付、竹田大操仕候、并物真似・狂言芝居、

雨天込日数五十日仕候

- 一 勸進本湊をの屋吉左衛門 同代 政右衛門
- 一 大坂座本丹波屋茂重郎、諸事町芝居なミニ請取申候
- 庄屋平兵へも罷出申候、
- 但シ御郡様より被為仰付候ニ付
- 頭仲間式人ツ、罷出候、出札五枚ツ、取、浜之役人三人ツ、
- 垣廻り人足四人半右衛門
- 左 平
- 甚 吉
- 新 八

- 一 大庄屋様御出被遊候
- 一 町御役人中様御出被為成候
- 一 諸事寺社方御役人中様御さばき
- (追筆)『一寺社御奉行様・郡御奉行様・御目付中様御棧敷懸り申候、三月十九日より町御奉行様御棧敷懸り申候
- 四月卅日ニ仕舞申候
- たいこ悦銭一貫文受取申候
- 狂言、鬼一法眼三略巻・三浦大介紅梅手縄・おさん茂平昔暦・国性爺・曾我菖蒲刀・加賀国篠原合戦』
- (『御用之控帳・助左衛門』文書番号119)⁽⁵⁾

この記事は1734年(享保19)3月「愛宕山」の寺院(円珠院に違いない)が五十日間開帳して竹田大操(人形芝居)その他を興行したことを記録したものである。興行された狂言の演題も、「鬼一法眼三略巻」「三浦大介紅梅手縄」「おさん茂平昔暦」「国性爺」「曾我菖蒲刀」「加賀国篠原合戦」など明らかになる。見廻りに来ているのが寺社奉行・郡奉行・目付・庄屋・役人などというメンバーから見てもこの「愛宕山」での開帳の規模が大きかったことがよくわかる、と川合氏は指摘する。愛宕山の景観については『紀伊名所図会』にも活写されている(図1)。

じつは、この時の開帳こそが、和歌山城下町の歴史上に画期をなす「中世の復活」であった。徳川御三家



図1 「円珠院・愛宕権現社」『紀伊名所図会』

の威信であろうか、紀伊藩城下町は見世物興行を厳密に管理統制して、1677年(延宝5)には吹上新堀のただ一箇所に制限するほどであった⁽⁶⁾。中世社会の公界(無縁)が近世に苦界に転じるといふ網野善彦説が、これ以上にみごとに当てはまるフィールドはあるまい⁽⁷⁾。ところが、このような近世の平和が破壊される時がくる。和歌山城下を震撼させる享保の大飢饉と大洪水(1732~34年)である。史上名高い西日本の1732・33年(享保17・18)の享保の大飢饉・打ちこわしについては先行研究も多く著名である。紀州ではこれに翌年1734年(享保19)初の大洪水が重なったため災害の影響はとりわけ甚大だった。城下では寺社の開帳が認められ、町在の「御救」として歌舞伎・操芝居の興行が40年ぶりに復活した(下記表1参照)⁽⁸⁾。紀伊藩の首脳は、権力の統制による秩序を断念して、民衆世界の自力救済に依存せざるを得なくなった。在地の悪党的な諸集団に救済をゆだねて、芝居小屋を始めとする小屋がけを公認したのである。その初発の嚆矢となった在所こそ、件の愛宕山五十日興行だった。中世の復活は、愛宕山

表1 1734年(享保19)初に許可された見世物興行(川合亜悠氏による)

2月4日~20日間	裏町(多門院寺内)	物まね芝居(田中町平兵衛)
2月6日~30日間	嘉家作	物まね芝居(湊小野屋)
2月27日~10日間	嘉家作	勧進相撲芝居(畑屋敷善四郎)
3月3日~50日間	愛宕山御開帳	竹田大操 物まね・狂言芝居(湊小野屋)
3月17日~30日間	中之島領馬道	浄瑠璃芝居(山口村庄屋)

に始まった。それは中世社会において、飢饉・疫病・外寇に際して日常的に現出していた神領興行(徳政)の風景に過ぎなかった⁽⁹⁾。

おそらく紀伊藩では、時限立法によって、かかる中世的な自力救済を排除する予定だったはずだ。ところが、一度失われた権力の平和は、二度と再び回復することなく、以後150年の長きにわたって無秩序は続き、明治維新を迎えることになる。愛宕山とは、民衆史の視点でみるなら、近世社会の秩序をゆるがす公界の巷であった。紀伊藩の崩壊は、うたがいがなく享保の城下水害を基点とし、愛宕山のなしくずしの興行(貧民救済)から始まったのである。川合氏の卒論は、そのような社会の深部を串刺しにした成果だったことになる。

さて、そのような性格をもった愛宕山とは、どのような空間だったか。円珠院石造物のなかに手がかりはあるはずである。

3 境内の霊場—石造物調査の成果(1)

円珠院の愛宕社と弁天堂の社殿の周囲を中心とする現在の愛宕社一帯には、坂東三十三箇所と秩父三十四箇所の観音霊場札所廻りの石塔が密集している。これらは、かつては山上に作られていたと思われる「写し霊場」であり、現在六地藏(五体現存、写真1)のある地点から上部に順番に展開していたものと推察される。年号を欠くために霊場の成立過程は造立者の在所と名義の分析、石材の分析によらねばならない。紙数の都合上、表2の記載データの中から材質の記述を削除したが、基本は観音本体が砂岩製で、銘文のある台座部分が花崗岩のものが基本組成である。聖地霊場の入り口に置かれた六地藏が「丁丑拾四年正月吉日」の紀年名をもつことは、霊場としての成立のひとつの目安となるものであろう。ところが丁丑14年には、寛永14年(1637)と文化14年(1817)とふたつの可能性がある。前者ならば愛宕権現の勧請後時を経ずに霊場(異界)が設定されたものであり、後者ならば享保の見世物興行開放以後の爛熟期の所産となる。近世の舟形石塔編年など、今後の検討を俟ちたい。石碑のなかには西国三十三箇所に該当する霊場がない。このことは、西国三十三箇所については実在の霊場を巡らせて、最後にこの地で遠方の坂東・秩父の両写し霊場を代替させて、総計百観音霊場札所巡りに見立てるといふ、独自の写し霊場方式を示すものに違いない。

以下、現在の所在地と銘文・形状を特定できる調査カードの整理一覧を図2・3、表2として示す。表3には、境内地にある写し霊場以外の石造物(あきらかに最近のものを除く)を示した。

4 墓所の法理—石造物調査の成果(2)

円珠院には境内地とは別に、東側の切り通し近くに墓所地が占地している。もっとも古い紀年名「寛永六

表2 円珠院境内 巡り霊場石塔一覧表(図2・3対応)

地図	札所番(原表記)	霊場(原表記)	施主の地名	施主
○	坂東三十三所			
①	第一番	相州鎌倉 大蔵山 杵本寺		哥沢 富尾 初瀬 早せ 滝山 川井 類瀬 たま かな子 杵井 浮川 そのませ つる
②	第二番	相州三浦 岩殿寺	万町	河内屋 藤兵衛
③A	第□(三)番	□□寺(安養寺)		とらや 宗兵衛
③B	第三番	相州 鎌倉田代		宇治田長四郎
④A	第四番	相州 鎌倉 長谷寺		南城代組 念佛講中
④B	第四番	上総 笠森寺	三木町	鈴木十之右エ門
⑤	第五番	相州足利 飯泉□(寺)		御城代組屋 林甚左エ門
⑥	第六番	伯州いやま 長谷寺		殿や 五兵衛
⑨	第九番	武さしの国 慈光寺	廣せ若早	左官 次助
⑩	第十番	むさし国 岩殿 正法寺		寺田氏
⑪	第十一番	武州 安楽寺	今ふく	曾右衛門
⑫	第十二番	岩つき 應恩寺	岡之谷	早川氏
⑬	第十三番	江戸 浅草寺	御薬種畑	大奥惣一統
⑭	第十四番	武州 弘明寺		□崇徳院
⑮	第十五番	上州 高さき 長谷寺		
⑯	第十六番	上州 水沢寺	新中通	源次右衛門
⑰	第十七番	下野 中善寺		保田氏
⑱	第十八番	下野 大谷寺		浦□
⑳	第二十番	ましこ 西明寺		才可や 弥左エ門
㉑	第二十一番	常州八溝 日輪寺		ち衛
㉒	第二十二番	常州 天の村 佐竹寺		卜衛
㉓	第二十三番	常州 かつた 正福寺		古□(代カ)
㉔	第二十四番	常州 雨引寺	出し満浦(出島カ)	はりまや 喜兵衛
㉕	第二十六番	常州 清滝寺		吉村柳右エ門
㉖	第二十八番	下総 なめ川 勝福寺	出じま浦	とりまや 角右衛門
㉗	第二十九番	下つけ 千葉寺	同町	観音講中
㉘	第三十番	上総 高倉寺		発心院
㉙	第三十二番	上総 清水寺	出じま浦	吉平
㉚	第三十三番	あわの国 なご寺		北村源二郎大郎
□	秩父三十四所			
1	第一番	四万部 妙音寺	本町四丁目	平岡屋 八之右衛門
2	第二番	大だる 正林寺	藤浦	森原 平井 花川 石橋氏
3	第三番	岩本 浄泉寺	新堀	桔梗屋 九太夫
5	第五番	こが寺	吹上	川上氏 政次
6	第六番	おきのごう 東向寺	塩屋村	庄屋 利兵衛
7	第七番	□□ふし 保長寺		片岡
9	第九番	ありち寺		小瀧氏
12	第十二番	野坂寺	塩屋村	粉川之 □三
13	第十三番	□□の□ 慈眼寺	吹上	山口屋 五郎
14	第十四番	□宮寺		小島氏 猪飼氏 □□
15	第十五番	招福寺	井原町	松しま屋 太一
16	第十六番	西光寺	塩屋村	幸吉
17	□□七番	□林寺(常か)		[]
18	第十八番	講堂 仲門寺	塩屋	室屋 利兵衛
20	第二十番	岩王寺	ひろせ通丁	ふじみや 佐兵衛
22	第二十二番	[]	卜半町	[]屋 彦右エ門
23	第二十三番			学右衛門
24	第二十四番	白山 法泉寺		廣川氏
25	第二十五番	くな 観音寺	湊横□□	井筒屋吉右□□(衛門か)
27	第二十七番	上かけ森 大円寺		□□氏 □川氏
28	第二十八番	橋立寺	□丁	寅次郎
29	第二十九番	□□のや 観音寺		多田要八 太田甚八
30	第三十三番	ふ□□に 室雲寺		発心院
31	第三十一番	わしのいわや 鷲岩寺		岡本谷右衛門ほか
33	第三十二番	般若 法生寺	小の町一丁目	松屋 織居
33	第三十三番	ごさんけ 菊水寺	新堀中	小ぐらや 宗兵衛
34	第三十四番	水くくり 水善寺		何某
X1~4	番・名称不明			

表3 円珠院境内石造物(巡り霊場石塔以外)一覧表(図2・3対応)

番号	種類	年	代	月	日	施主の地名	施主	材質
イ	地蔵							(本体)砂岩 (台座上部)砂岩 (台座下部)花崗岩
ロ	鳥居	1791	寛政3	9	吉		講中	花崗岩
ハ	燈籠	1902	明治34	5		和歌浦	和中金助	花崗岩
ニ	燈籠	1904	明治36	5	吉	海舛郡濱中村	宮下又七 堀田海吉 同為吉	花崗岩
ホ	手水	1663	寛文3	5	吉		井口九太夫正元	花崗岩
ヘ	花立て						森氏	花崗岩
ト	花立て						森氏	花崗岩
チ	花立て							花崗岩
リ	花立て							花崗岩
ヌ	花立て							花崗岩
ル	石碑						地寶院	緑色片岩
ヲ	燈籠							花崗岩
ワ	鳥居							花崗岩
カ	燈籠						□(紀か)勢御家中	花崗岩
コ	地蔵坐像							花崗岩
ク	地蔵坐像							(本体)砂岩 (台座上部)花崗岩 (台座下部)花崗岩
ケ	石碑	1888	明治21	10	2		(端莊居士(根来氏)の碑)	緑色片岩
コ	花立て							花崗岩
ツ	燈籠の心柱の一部	1676	延宝4	1	吉		九郎兵衛 惣兵衛 六兵衛 傳兵衛 茂大夫 平吉 多右衛門 角左衛門 小左衛門 又四郎ほか 12名	砂岩
ネ	燈籠の心柱の一部	1688	天和3	7	24		三十六人講中	砂岩
ナ	石柱燈籠	1808	文化5	5	24	東長町二丁目	有田屋孫市	花崗岩
ラ	石柱燈籠	1808	文化5	1	24		平田幸左衛門	花崗岩
ム	手水	1727	享保12	1	24	布引	布曳講中	花崗岩
ウ	地蔵	1698	元禄11	1	24		孫兵衛 茂兵衛 庄右衛門 次兵衛 安右エ門 太良兵衛 五兵衛 八兵衛 市 良兵衛 五兵衛 長兵衛 源兵衛	花崗岩
キ	法華塔							花崗岩
ノ	石柱燈籠	1808	文化5	9	24	新堀	何某	花崗岩
オ	石柱燈籠	1808	文化5	5	24		細田吉次郎	花崗岩
ク	地蔵	1744	寛保4	3		小人町	講中 日高屋善六右衛門	花崗岩
ヤ	手水鉢	1853	嘉永6	6	吉		成田 []	花崗岩
マ	台座	1719	享保7	1	24	新堀西町	講中 利右エ門 相分仁 孫右エ門 助十郎 九兵衛 次兵衛	砂岩
ケ	石碑	1917	大正6	秋			(津田藤麿君之碑)	(本体)緑色片岩 (土台)花崗岩
フ	標柱	1917					(「從此至愛宕山」)	花崗岩
コ	石階段					在町	在町講中 (階段正面の右側に銘)	
エ	花立て						森氏	花崗岩
テ	燈籠の一部	1682	天和2					砂岩
ア	石碑	1885	明治18	8			谷口莊三朗	(本体)砂岩 (土台)緑色片岩
サ	燈籠	1780	安永9	1	24		講中	花崗岩
キ	燈籠	1780	安永9	1	24		暁州	花崗岩
ユ	石標柱	1784	天明4	3	24		(愛宕大権現)	砂岩
メ	地蔵立像	1637 1817	丁丑	1	吉		(愛宕山上の六地蔵のうち)	砂岩
ミ	地蔵立像						(愛宕山上の六地蔵のうち)	砂岩
シ	地蔵立像						(愛宕山上の六地蔵のうち)	砂岩
エ	地蔵立像						(愛宕山上の六地蔵のうち)	砂岩
ヒ	地蔵立像						(愛宕山上の六地蔵のうち)	砂岩

表4 円珠院東墓地石造物一覧(図4対応)

番号	西暦	元号	月	日		俗名・戒名(施主・建立者)	材質
1					阿弥陀石仏カ		砂岩
2					阿弥陀石仏カ		砂岩
3					地藏石仏		砂岩
4					石仏		砂岩
5					石仏		砂岩
6					阿弥陀石仏カ		砂岩
7	1940	昭和15	4	6	墓標	普照院貫光和尚	花崗岩
7					燈籠	7-2(施主米田貫眞)	花崗岩
7					燈籠	7-3(施主米田貫眞)	花崗岩
8	1828	文政11	1	10	無縫塔	□(泰カ)尊大徳	花崗岩
9	1836	天保7	6	2	無縫塔	権律師實眞	花崗岩
10	1819	文政2	3	12	無縫塔	大徳貫浄(当院10世法印貫節弟)	花崗岩
11	1859	安政6	3	10	無縫塔	二藁法印貫仲(当院9世貫珠末弟 施主13世貫忠)	花崗岩
12	1824	文政6	12	17	無縫塔	貫鎮法印	花崗岩
13	1775	安永4	9	16	無縫塔	権大僧都法印慧巖	砂岩
14	1745	寛保4	5	1	無縫塔	権大僧都法印亮巖	花崗岩
15	1702	元禄15	8	13	墓標	権大僧都法印豪詮(逆修)瑞雲寺5世	砂岩
16					供養碑	榮願(当寺2代目)	花崗岩
17	1699	元禄12	2	24	地藏立像		花崗岩
18	1852	文久2	3	2	無縫塔	恵澄大和尚(施主法春貫忠)	花崗岩
19	1913	大正2	4	18	無縫塔	一雨院権僧正貫忠	花崗岩
20	1898	明治31	6	12	千手観音像	権律師貫綱	
21	1658	萬治1	7		墓標	月窓姉秋禪定尼靈位	砂岩
22	1640	寛永17			墓標	大法師泉識 靈位	砂岩
23					墓標	常樂我浄禪定門 下男平田安吉	花崗岩
24					墓標	貫鎮法第 貫純□印	花崗岩
25					墓標	貫鎮第二 鎮修	花崗岩
26	1791	寛政3	12	29	無縫塔	暁州	花崗岩
27	1989	平成1	8	吉	墓標	岡本家代々墓	御影石
28					墓標	岡本十兵衛	花崗岩
29	1849	安政2	2	11	地藏坐像	蓮乘院・智光院・月光院(施主岡本)年号2つ(嘉永5・2・11<1849>)	花崗岩
30					墓標	務義 重穂(兄弟墓)	花崗岩
37	1854	安政1	11	8	無縫塔	権大僧都貫光(瑞光寺12世)	花崗岩
38	1792	寛政4	11	29	無縫塔	一地院権僧正貫春	花崗岩
39	1811	文化8	2	21	一石五輪塔	真珠院 [] 権大僧都貫珠 貫珠法印甥 瑞光寺代9世	花崗岩
40	1788	天明8	12	4	一石五輪塔	貫珠俗兄 和歌(地名) 寛藏院10世	花崗岩
41	1835	天保6	5	28	一石五輪塔	権大僧都貫瑞 俗姓 藤本伴次郎三男 瑞光寺11世	花崗岩
42	1993		1	26	無縫塔	聴泉院貫眞僧都	御影石
43	1835	天保6	7		石燈籠	(施主貫光)	砂岩
44	1633	寛永10	6	24	一石五輪塔	妙蓮禪定尼	砂岩
45					石仏		砂岩
46	1633	寛永10	11	12	一石五輪塔	徳西禪定門	砂岩
47					一石五輪塔		砂岩
48					宝珠・笠		砂岩
49					宝篋印塔(笠部)		砂岩
50					自然石墓		緑泥片岩
51					自然石墓		緑泥片岩
52					自然石墓		緑泥片岩
53	1691	元禄4			墓標	正光院 亮海	砂岩
54	1629	寛永6	1	18	墓標	慶順法師靈□(恵カ)	砂岩
55					自然石墓		河原石
56					石燈籠(心柱の一部)		砂岩
57					石燈籠(心柱の一部)	(施主貫忠)	砂岩
58					石燈籠の基壇		砂岩
59					宝篋印塔(相輪)	(欠損)	砂岩
60					石燈籠の基壇		砂岩

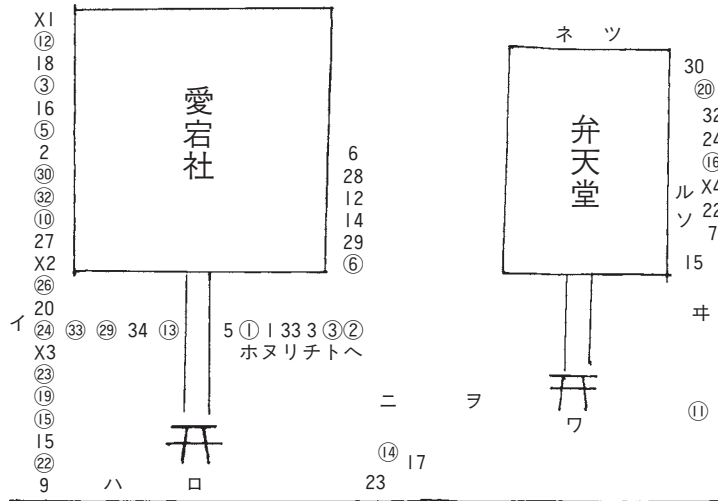


図2 円殊院境内見取図(1)

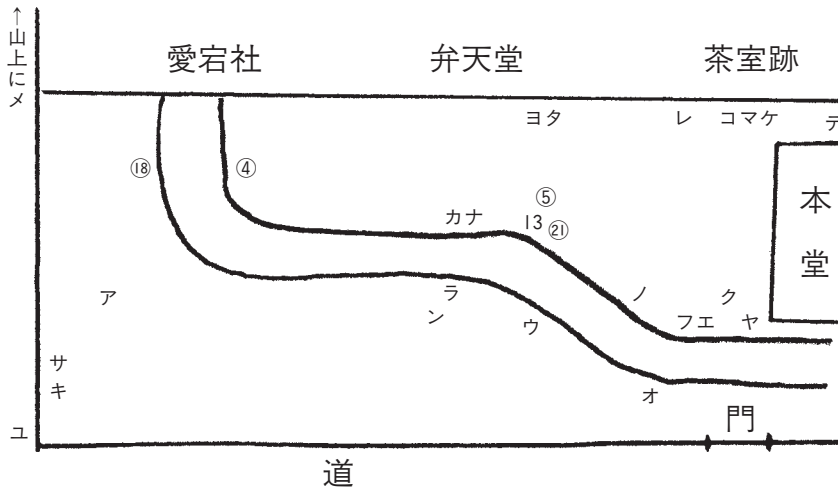


図3 円殊院境内見取図(2)

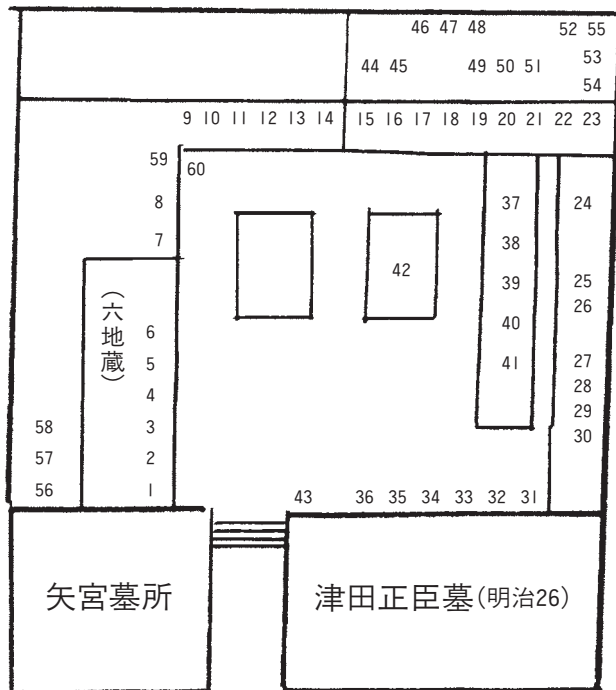


図4 円殊院東墓地見取図

年」の墓塔や「寛永十年」の一石五輪塔(いずれも砂岩)もこちらに所在している。入口に六地藏様に並べられた阿弥陀石仏(表4 1～6号)や宝篋印塔残欠(同49・59号)のなかには、中世に遡る可能性のある石造物もある(北野隆亮氏の意見)。この山麓には、近代のものであるが、雑賀惣鎮守の矢宮神社の宮司家(矢田部家)の墓所もある。紀伊一宮日前宮の宮司家の墓所が花山(音浦山)の麓(現花山温泉)にあるのと対照される。愛宕山は、単に近世和歌浦の北限であったにとどまらず、中世惣国の御世には東の音浦(花山)に対応する雑賀平野の西の聖地だった可能性がある。現在の円珠院駐車場(墓地と境内の空き地の部分)にはかつて和歌山大学の施設が立っていたこともあり、近代以後も多くの改変のあった場所である。総体として理解する必要がある。

5 聖地の結界—石造物調査の成果(3)

中世・近世には異界とされた愛宕山の山頂部は、現在私有地となっている。近代の巨大な貯水施設がつくられるなど、近代化遺産としても貴重と思われるが、未調査である。麓の六地藏についてのみ、許可を得て調査した。先述の通り、丁丑14年の一括遺物であり、愛宕山霊場の成立を考える手がかりとなるだろう。



写真1 六地藏



写真2 山上の愛宕社殿

6 若干の考察

今回の調査は円珠院境内(愛宕社・弁天社)山内・墓所のすべての石造物を対象とした。全体像を把握する

ため、銘文の解釈・記録を最優先課題とした。愛宕社周辺の石造物群は花崗岩製の石造物が二十九体、砂岩製石造物は二十六体の比率で存在することがわかり、台座は全て花崗岩製であった。坂東三十三所巡り石造物二十一体と秩父三十四所巡り石造物十四体が現存した(三十三所霊場巡り)石造物に関しては、台座が逆に据え付けられているものや、本体と台座の材質が異なることから、本体と台座が本来あるべき組み合わせでない可能性が高い。この写し霊場が、実物の西国三十三所巡りを加えた百観音霊場札所巡りであることは先述した。石造物の施主は和歌山城下の有力商人層のものが多く、共通の特色はあるのだろうか。

このような石造物が祈願の趣旨を刻むことはまれだが、一覧表をみると「二十四日」の日付をもつ塔が多いことに気づく。日付記載のある石塔全33基のうち12基が24日付けであり、とくに境内地にある10基はすべてが24日付けである。民俗年中行事表によれば、6月24日は愛宕千日詣、7月24日は地藏盆、11月24日は大師講とある。信仰内容から推して、愛宕山に結縁するため縁日の24日が選ばれたものと考えて誤りなからう。日付のあるすべての石塔が24日紀名である円珠院境内地は、愛宕信仰の聖地であったのである⁽¹⁰⁾。

さらに、すでに福塚氏・江本氏が紹介したものであるが、造立塔のなかには大奥が施主となった「大奥惣一統」奉納塔がある(写真6)。



写真3 坂東札所・第13番浅草寺石塔(基礎)拓本

坂東・秩父等の百観音札所写し霊場の石仏の台座に寺名、施主名を刻むが、坂東第13番札所「浅草寺」石塔の基礎に「御薬種畑／大奥惣一統」とある(写真3)。江本氏の考察に寄れば、御薬種畑とは浜御殿のことで、六代藩主重倫(しげのり)が最晩年をすごしたという。下屋敷の湊御殿は二度にわたる火災に見舞われて、1815年(文化12)～29(文政12)の二度目の被災の後には、重倫はこの下屋敷には戻らず、「御薬種畑様」と呼ばれ

ていたという。したがって、この大奥は最近発掘調査によって庭園が確認された和歌山城西の丸の大奥ではなくて、隠遁した重倫付きの大奥だということになる。「惣一統」すなわち大奥に仕える女性たちが施主となったわけだが、その理由は度重なる火災に見舞われた重倫たちが、火伏せの神である愛宕神に帰依したためだからであろうと江本氏は推定した⁽¹¹⁾。さらにこの巡り霊場の成立自体を、19世紀のこの時期に比定した。

坂東札所の第1番は、在所が不明であるが「歌沢 富尾 初瀬 早せ 滝山 川井 類瀬 たま かな子 杉井 浮川 その ませ つる」の結衆が造立している。明らかに花柳界の女性名で、あるいは大奥ともかわる可能性がある。他に女性の施主は確認できないものの、地名をみると、新堀・吹上・今福・広瀬町・岡の谷など、見世物や芝居興行の行われた在所が集中している。さらに見世物興行の全体像を分析する必要があるが、2章で分析した「中世の復活」無縁の場所の信仰拠点と関わる可能性がある。

表4の施主の在所や階層分析を進めることによって、「辺界の悪所」としての愛宕山の機能が浮き彫りになる。紙数も尽きたので、私の考察と役割はここまでにしたい。

おわりに

この調査は、江本英雄氏の勧めにより和大本史(海津)ゼミの有志が「小雑賀」研究を進める中で実施した調査である。私たちは、小雑賀地区の史料を集める過程で、現在の国体道路の設置が地域史研究に及ぼした影響を考えざるを得なかった。同じ轍を踏むことのないように、「第2国体道路」の設置過程で犠牲になりかねない歴史的な景観を考慮して、愛宕山円珠院を対象に、2011年2月2日、3月11・17・19の四日間集中調査に取り組み、それ以後堤千畝が個別に補足調査して、整理作業を実施したものである(2012年4月にゼミにて報告)。本論文の図と表はすべて堤氏の作成したものである。



写真4 愛宕社前の集合写真

先述のように、和歌山地方史研究会の会誌において成果の公表を予告していたが、複数の事情があって遅れてしまった。末尾になったが円珠院の米田かよ住持には大変お世話になった。御礼申し上げます。

調査参加者一覧 円珠院調査団(海津一朗ゼミ59期・60期・61期生)。作表は堤千畝による。

協力者 上村雅洋 江本英雄 川合亜悠 北野隆亮 藤本清二郎 山下奈津子

註

- (1)『紀伊続風土記』より。なお『紀伊名所図会』は、寛永年中比叡山不動院顕栄の草創と記す。
- (2)高橋修「紀州東照宮の成立と和歌浦」(和歌山県立博物館編『紀州東照宮の歴史』1990)には、「愛宕権現は、火伏の神様で、京都で王城鎮護の神として、北西愛宕山に祀られている。また和歌浦愛宕権現社はやはり、王城の鬼門を守る比叡山の愛宕権現を勧請したものであった。このような愛宕神の信仰内容もあわせ考えると、和歌浦愛宕権現社は東照宮の鬼門を守る神として勧請されたものと想定される。愛宕山は、計ったように、東照宮の北東=鬼門に位置している。」と記されている。
- (3)江本英雄ほか「円珠院における石造物調査の経緯と概要」(『和歌山地方紙研究』60 2011)。調査の経緯について、福塚氏は次のように説明している。「2015年に開かれる和歌山国体に合わせた整備計画によって門前の道を大幅に拡幅して境内地を北よりに移動するという計画が進んでいる。すでに第二国体道路にアクセスする基幹道整備のため、切り通しの西側は六車線道路に作り変えられた。円珠院の歴史的な景観は危機に瀕しており、沿道の文化遺産は「立ち退き」の危機を迎えた。私たちの研究会は、小雑賀地区の研究を進める中で、和歌浦の北の守りである愛宕山の重要性を再認識した。また国体道路の建設が、地域の秩序を大きく揺るがしたことも教訓として学んだ。」
- (4)川合亜悠『和歌山城下町における近世芸能興行』(2011年卒業論文)
- (5)紀州藩半番頭家文書編纂会(林紀昭代表)編『城下町警察日記』清文堂 2003年(476頁)に所収。解説・解題は藤本清二郎氏。
- (6)『和歌山市史』2巻(359頁以下の各所に記述がある)。
- (7)網野善彦『増補 無縁・公界・楽』平凡社、1996年
- (8)竹下喜久男「紀州田辺領における芸能興行」(『佛教大学研究紀要』72、1988年、のち同氏著『近世地方芸能興行の研究』清文堂 1997年に転載。該当部分は再録者の164頁以下である)。
- (9)海津一朗「徳政の系譜」(村井章介編『日本の時代史10南北朝内乱』吉川弘文館)の中世民衆運動理解を参照。
- (10)この事実は、現在の境内石塔が愛宕山上にあったことを断定させる。これに対して、墓地域については24日塔が有銘日付塔全体の8%に留まっている。相互間での石造物の移動が認められないことにも注意しておきたい。
- (11)註3論文において、江本氏は次のように論じている。「現状の円珠院境内は近世の景観を失い、愛宕山の南麓に片寄せて、本社・愛宕大権現と弁財天社も山上から下ろされ並んで建つ。堂の左右や前方、境内の各所に多数の石仏が並ぶ。坂東・秩父等の百観音札所写し霊場の石仏である。台座に寺名、施主名を刻むが、中にやや大振りな台座に「御薬種畑／大奥惣一統」とあり、変わった施主名が興味をひく。御薬種畑とは浜御殿のことで、六代藩主重倫(しげのり)が最晩年をすごした(文化七〜一年、同一二年〜文政一二年)。二度にわたる湊御殿(御下屋敷)の火災による。あとの被災の後は、湊御殿に戻らず「御薬種

畑様」と呼ばれていた。石仏造立の時期もこの頃だろう(写し
霊場石塔はすべて年号が刻まれていない。砂岩と花崗岩の石
質等から類型化をすすめている最中である)。「惣一統」すなわ
ち大奥に仕える女性たちがこぞって喜捨し施主となったのは

愛宕が火伏せの神だからである。何げない石仏の歴史をきっ
かけに、市道拡幅の計画が取り沙汰される円珠院に本格的な
調査を加え、文化財保護と研究の光をあてる好機としたい。



写真5 坂東一番・秩父一番(5①1)



写真6 「大奥惣一統」の第十三番(13)



写真7 手水(ホ)の拓本



写真8 東墓地(44・45)



写真9 円珠院参道(ウの前)